明柔

明大柔道部１００年の軌跡

目次

口絵　明治大学創立一二〇周年記念館リバティタワー　……1
グラビア　遙かなる雄姿　……2
栄光の明柔―五輪・世界・全日本チャンピオン　……4
明治大学校歌　……14
発刊にあたって　百瀬恵夫　……19
柔道部の創部百周年を祝う　納谷廣美　……21
創部百周年にあたって　長吉泉　……22
明治大学柔道部百周年を祝す　嘉納行光　……23
明治大学の想い出　ベン・ナイトホース・キャンベル　……24
明治大学（柔道部）一〇〇周年　フランソワ・ベッソン　……26
明治大学柔道部百周年によせて　柘植健司　……28
明治大学柔道部百周年によせて　山下泰裕　……30

序　章　柔術から柔道へ

講道館創設　……32
歴史の証言
嘉納治五郎を語る　諸橋轍次　……39

第一章　百年の伝統

激動の時代に礎を築く　……42
戦時下の柔道　……44
戦後、柔道の復活　……47
歴史の証言
新免純武先生の手紙　姿節雄　……50
感想　小田常胤　……52
感想　鈴木潔治　……52
柔道部の現在を語る　古賀治朗　……53
明大柔道部の現況（昭和五年）　橋本記　……55
全日本柔道選士権大会出場記　牧野政信　……56
光陰矢の如し　宮島龍治　……58
思い出の柔道部　高橋康　……59
汗こそ最良の教師　小宮良平　……60
明大柔道部　修業時代の想い出　田渕裕己　……62
復活の産ぶ声　あれから既に六十年　古賀愛人　……64
八島輝徳先生と明大柔道倶楽部　神田和夫　……67
葉山先生への想い　渡辺政雄　……68
姿寮の発足　岩﨑勇　……69
姿寮で学ぶ　栗原英道　……70
澄水園と明大柔道部　工藤欣一　……72
鵜目のオヤジさんと澄水園　神永昭夫　……73
白雲寮と久米勝先生　『明柔』編集部　……75
八幡山合宿所の思い出　飛松秀樹　……76
目黒合宿所の思い出　小林昇　……78
目黒・合宿所の思い出　松本順吉　……80

第二章　闘魂の記録

闘魂の記録　一九五一～二〇〇四年　……84
1951／87　1952／88　1953／92
1954／94　1955・56／98　1957／100
1958／104　1959／108　1960／110
1961／112　1962／114　1963／118
1964／120　1965／126　1966／128
1967／130　1968／132　1969／134
1970／136　1971／140　1972／143
1973・74／146　1975／148　1976／150

1977・78／152　1979・80／155
1981・82／156　1983・84／158
1985／160　1986／162
1988／166　1989／168
1991／172　1992／180
1994／190　1995／192
1997／196　1998／198
2000／202　2001／204
2003／208　2004／210
2002／206　1999／200
1996／194　1993／186
1990／170　1987／164

明大の技

曽根康治の内股……90
渡辺政雄の大内刈……95
岩崎勇の内股……96
渡辺欣嗣の内股……97
神永昭夫の浮技……101
徳山操の背負投……102
篠原一雄の足払い……109
田中章雄の足車……111
村井正芳の大外刈……117
関勝治の大内刈……119
篠巻政利の内股……131
国安教善の支釣込足……137
河原月夫の内股……139
岩田久和の背負投……142
川口孝夫の巴投……145
新垣修の蟹挟……160
小川直也の支釣込足……163
石田輝也の袖釣込腰……171
秀島大介の小内刈……188
大瀧賢司の大外刈……189
松本昌広の内股……190
猿渡琢海の大外刈……197
阿武教子の大内刈……211

歴史の証言

閉会式　宮柊二……124
奮起を望む　金子泰興……153
監督時代を振返って　関勝治……153
努力・結果・喜び　原吉実……175
雌伏の時代、復活優勝と連覇　重松裕之……176
アテネで何を感じ、今何を見据える　長谷川聡……212
学苑会（二部）柔道部の歩み　圷昭二……212
大学の枠を超えて
新時代の旗手、明大柔道部　是松恭治……214
明大を目指し切磋琢磨　渡辺喜三郎……215
明大柔道部の永遠性を願う　山岸均……217
打倒明治を目標に頑張る　古賀武……217
伝統の底力　植村健次郎……218
難攻不落の明大柔道部を破った日　片岡安……220
打倒明治を目標に稽古　藤猪省太……221
戦いに臨む姿勢を学ぶ　斉藤仁……222
明大の指導で防大柔道の基礎固め　木家勝……223
懐かしき人びと　明柔と拓大　宮澤正幸……226

第三章　明大と実業柔道

日本柔道を支える実業団……228

歴史の証言

実業柔道の発展に大きな役割　阿南惟正……230
新日鉄の名選手たち　岩井正和……231
実業柔道の現状　村井正芳……236

警察柔道と明柔　植草勝 …… 239

第四章　国際化への道を拓く

明柔、イン・ザ・ワールド …… 244

歴史の証言

砂漠の国　サウジアラビア　鳥海又五郎 …… 247
シリアから　永吉勝憲 …… 248
世界目指すチュニジア柔道　押切義春 …… 249
柔道で日米の架け橋に　篠原一雄 …… 250
カリブ海の島　プエルトリコ　富田弘美 …… 253
メキシコ二十三年　素晴らしい出会い　山口友孝 …… 255
ブラジルから　平島征也 …… 257
フランスで思うこと　吉田尚生 …… 258
中国で企業展開　佐々木充行 …… 260
バラが咲いた　藤本一博 …… 262
昭和六年度秋　明治大學柔道部渡米日記（抄）　T・Y …… 264
戦時下のアメリカ遠征　葉山三郎 …… 272

第五章　明柔会　伝統の支え

OBの熱情が原点 …… 274

歴史の証言

感　想　花桐清二郎 …… 275
感　想　鈴木潔治 …… 275

歴史の記録 …… 276

歴史の証言

目黒新合宿所建設当時を偲ぶ　高田誠之助 …… 280
伝統を守るOBの熱意と愛情　濱本義典 …… 282

奨学金委員会より　杉原構 …… 283

各地の明柔会だより

明柔会東海支部　河原月夫 …… 284
大阪明柔会の歩み　大橋武彦 …… 284
九州明柔会から　神永正夫 …… 285
歴代明柔会員（卒業年度別） …… 286

マスコミの見た明柔

柔道新聞創刊の頃　徳田浩 …… 292
優勝の歌　尾崎透 …… 293
忘れられない優勝大会での歓喜　谷戸忠司 …… 294
受け継がれる明治の勝負魂　滝口隆司 …… 295
魂の明大柔道　木村秀和 …… 296
確固たる柔道スタイル　三浦良久 …… 297
伝統を継ぐ者のプライド　山口大介 …… 297
強くなるということ　久保健一 …… 298
明治魂詰まった「四畳半」　竹園隆浩 …… 300
トップランナーの矜持　小泉欽司 …… 301

謝辞　渡辺政雄 …… 303

題字　納谷廣美
装幀　里村万寿夫
編集協力　鷲巣俊子
カット　犬飼三千子

発刊にあたって

明治大学体育会柔道部部長
百瀬恵夫

名門明治大学体育会柔道部の部長をお引き受けしてから、四半世紀になる。私の定年を迎える年に、創部百周年と重なった。輝かしい伝統と実績が名門たるゆえんである。

在任期間中の思いを込めて、次のことを記したい。

第一に、平成三（一九九一）年、十九年ぶりに「全日本学生柔道優勝大会」に本学が優勝したことである。それまでに明大柔道部は勝つことを忘れてしまったほどの停滞を余儀なくされた部を見事に返り咲かせてくれたのが、原吉実監督であった。〝鬼監督〟といわれた氏の献身的な柔道に対する情熱と指導力にはただ頭が下がるのみである。氏は、寝食を忘れて明大柔道部の復活〝優勝〟に向けて朝から晩まで、道場に立ちつづけて猛練習を繰り返した。力をつけるためには稽古しかない。努力は必ず結果を出すといって、稽古の虫になることを自らが先頭に立って、ごまかしのないきめ細かな指導方法によって優勝に導いてくれた。十九年ぶりに優勝した時に先輩監督であった神永昭夫氏は「原君、一度だけの優勝であればマグレといわれる。来年も優勝することだ」ときつい言葉であった。一人の選手がケガをしても駒が不足するという極少人数で、代役がいない部員で相手を倒すのであるから大変である。そんな中での二年連続優勝は本当に立派であった。

原監督の教えを受けた部員の中から、オリンピックや世界選手権で、多くのメダリストが輩出したのは、厳しい稽古から生まれたものである。

第二は、合宿所の建設である。目黒にあった合宿所は、とうてい人間が住めるような代物ではなかった。「寝ていたら天井のベニヤ板が顔に落ちてきた」、本当の話である。学生の親が合宿所に来られた時に「ここで辛抱できれば…」と涙して帰った人もいたという。物凄い合宿所で、私にはお化け屋敷に見えた。いくらなんでもこれでは時代遅れもはなはだしい。そこで、柔道部のＯＢ会が中心になって建設資金を集めることになった。総工費一億五千万円、うち三分の二をＯＢ会、三分の一を大学が負担することで、一億円をＯＢ関係者の浄財によって、立派な合宿所の完成をみた。すばらしいＯＢの結束がなければ、合宿所の建設を見ることはできなかった。

第三は、柔道場の移転である。小川町校舎の老朽化と校友会館の建設を進めるために、道場の移転を余儀なくされた。移転場所は、一〇号館の五階である。大学当局の理解とご協力によって、当方の希望を認めて頂き立派な道場ができた。旧道場に取材に来られる記者諸氏は、「この道場（設備）から良くぞ名選手が出たものだ」、「伝統の明大柔道の道場がこれか」とただあきれて取材していったものである。大先輩曰く、「このような貧弱な道場の中

から名選手が続出したのが明大スピリットだ」と、叱咤激励していた頃に比べると、新道場とは〝月とスッポン〟の差である。

第四は、柔道部のＯＢによって構成されている「明柔会」（渡辺政雄会長）の存在である。私は、全国にあまたある大学ＯＢ会の中で、これほど纏まりがあって、部を物心両面でしっかりと支援してくださっているのは、明柔会を置いて他にはないと思う。ＯＢ会が独自の奨学金制度を設けて、浄財を集めて支援してくれている。近年、大学当局も漸く少しずつ奨学金を支給するようになった。明柔会の支援がなければ、部はとうてい有望な選手を集めることはできない。

第五は、明柔会広報誌としての『明柔』の存在である。昭和五十七（一九八二）年十月創刊以来、現在で五十二巻となっている。『明柔』には現役の部活動や大会記録、ＯＢの活躍や結婚情報にいたるまで、多彩な内容となっている。編集長である小林敏邦氏の尽力によって、評判もいたって高い。時を刻むに従って、柔道部の歴史と記録を残している点においても、スポーツの文化史としての意義を備えている。

第六は、師範姿節雄先生のご逝去である。姿先生は、三船久蔵初代師範の門下生として心・技・体を会得した指導者として、明大柔道部一筋に精励された。今日の柔道部は、歴代師範、監督、コーチ、マネジャーの献身的な指導があったからこそであり、とりわけ姿先生の存在は実に大きなものであった。赤帯の柔道着を身につけた先生のお姿が見られなくなったのは痛恨の極みである。心から姿先生のご冥福を改めて御祈り申し上げる次第である。

最後に、私見を申し上げたい。次のことは柔道部のみの問題ではなく、他の部にもいえることである。

第一は、優れた選手を確実に入学させる方式（ＯＡ方式他）の確立である。監督が合格を条件に相手方と話が出来るだけの裏付け（保障）が必要である。確約ができない状況のために、他大学の引きに負けてしまう。これに準じて奨学金制度も部に割り当てて、人数に応じて優秀選手に対しては、入学と奨学金をワンセットにすることである。

第二は、監督・コーチの指導者としての位置付けと報酬についてである。今までは、すべてＯＢのボランティア活動によるものである。これには自ら限界がある。きちっとした制度を確立して指導者に対する報酬規定を設けて待遇を明確化することである。指導者は、職員並みの実技指導者としての役割と処遇をもって迎えることが望まれる。柔道部を十九年ぶりに優勝させた原監督が、指導者として専念できたのは、氏の物心両面を援助して下さったＯＢのＨ氏の存在があったからである。

明大の体育会の存在は、明治大学の広告塔である。マスコミが取り上げるスポーツ記事は、ＰＲ効果が絶大である。そのことを考えれば、監督・コーチに対する報酬は知れた額である。

第三は、明大付属校のスポーツ振興と明大との一貫教育である。付属校に将来性のある選手を入学させて、付属校で強化選手として育てた学生を明大に無条件で入学させる一貫した制度を確立することである。体育会のプライオリティをつけて、強化選手を付属校からの一貫教育によって育成することが重要である。

以上のことを書き遺して、私が大好きであった明大柔道部を万感の思いで去ることにする。そして柔道部が永遠に光り輝くことを心から念じて止まない。

柔道部の創部百周年を祝う

明治大学 学長　納谷廣美

明治大学体育会柔道部が創部百周年の慶事を迎えるにあたり、明治大学を代表して関係者各位に対し心よりお祝いを申し上げます。

明治大学の柔道部は、創部百年という歴史のなかで光輝ある伝統を築き、現在では日本の柔道界では勿論のこと、世界にその名が知れわたっている存在であることは、周知のとおりです。昨年放映されたＮＨＫの「プロジェクトＸ」というシリーズ番組の中で、明大ＯＢの神永昭夫氏と上村春樹氏を中心に柔道・日本の神髄に迫る番組がありました。そのなかで神永氏が東京オリンピック大会（昭和三十九年、東京開催。そして柔道が初めてオリンピックの公式競技として認められた大会）の決勝でヘーシンクに負けた試合のひとコマがありましたが、それは、私の脳裏に今なお鮮明に残る思い出の一つになっています。日本の伝統武道の柔道において、まさか日本が敗退するとは予想にもしなかった一般市民の一人として、驚愕の極みでした。身体の小さい日本人が巨体の外国人を投げ飛ばしてくれることを私どもは期待していたからだと思います（当時、神永氏がケガで十分な体調でなかったことは先程の番組で知りました）。「柔よく剛を制する」と言われてきていたが、そのことは正当なものだったかとの疑念も抱いたほどでした。しかし、この敗北感や疑念は、神永氏が明大柔道部監督になり、後輩の上村氏を育て、そして彼がオリンピックで、まさしく「柔よく剛を制す」技を発揮して金メダルを獲得できたという一連の経過のなかで解消されました。この先輩・後輩の関係こそ、明大柔道部の創部精神を具現化したものであり、厳しい鍛錬を通じて「個」を強くし、そして社会に有為な人材を輩出してきた歴史と伝統は、そのまま明治大学の建学の理念「権利自由」「独立自治」に合致したものといえると思います。昨年（二〇〇四年）開催のアテネ・オリンピックでは、出場三回目にして金メダルを獲得したＯＧ阿武教子さん、そして銀メダルを獲得した現役の泉浩君の活躍は、〝明柔〟の誇りと名声を世界に発信し、われわれ明大人に感動を与えたものであり、改めて、柔道部が明治大学体育会の輝ける代表的な存在であることを印象づけたものでありました。

過去には、全日本学生柔道優勝大会での初の四連覇達成など全日本学生柔道選手権優勝最多校、オリンピック・世界柔道選手権メダリスト最多校という輝かしい戦績を残しており、また柔道界でその名を遺した著名選手が数多く、その名を枚挙することができない（失礼の段、ひらに御容赦賜わりたい）ほど卒業生は多士済々です。

これは、優れた師範や部長先生、さらに熱心に指導にあたる先輩など数多くの先達による献身的な御尽力と、これに応えてきた学生諸君の精進が輝かしい伝統を築き、そして道場での激しい日常的な稽古のなかで創部の精神を伝えてきたことの成果であると確信いたしております。

これからも、武道としての在り方にも留意されて光輝ある伝統を継承するとともに、わが国の柔道界の中心的な存在として活躍できる数多くの人材を輩出していただきたく存じます。

最後になりましたが、貴部の愈々の御発展を祈念して、私の祝辞といたします。

創部百周年にあたって

明治大学 理事長　長吉　泉

明治大学体育会柔道部が創部百周年を迎えられました。

「柔道は人間形成の一大修行なり、礼儀正しく、質実剛健を旨とする」を創部の精神と掲げ、百瀬恵夫部長、秀島大介監督、ならびに歴代の錚々たる指導者の下、部員諸君が結束を固め、これほどの歴史を築き上げてきたことに、敬意を表します。

この記念すべき時を迎えるにあたり、かかる記念誌を発刊されますことは、誠に時宜を得たものであり、実に意義深いものと存じます。本学体育会の歴史と重なる柔道部の歴史、その光輝ある伝統を顕彰し、益々の発展を願って発刊される本誌には、多くの熱い思いが寄せられるものと存じており、その確認と伝承は、期待に違うことなく、さらなる飛躍への原動力となることでしょう。

本学の柔道部の歴史を顧みるに、明柔会抜きでは語ることができないと聞きます。伝統あるクラブには、その強力な支援団体として、必ずと言って良いほど、しっかりしたＯＢ組織が確立されているものであります。明柔会の皆様の、単に人的・金銭的に支援するというだけでない、現役学生と一体となって、柔道部の繁栄に尽力されているその姿勢には、頭の下がる思いです。このような強力なバックアップ体制があってこそ、盤石の百年と言うことができるのでしょう。

さて、申し上げるまでもなく、柔道は、単なる運動競技種目として、体力・技術の向上を図るだけでなく、精神修養に重きをおいた「武道」であります。現代のような世相の中、勝利至上に傾くことなく、己を律することは、簡単なことではありません。しかしながら、他の強豪校に比べ、部員数は少ないながらも、名門大学の中で最多の優勝回数を誇る伝統の本学体育会柔道部において、鍛錬を重ねた部員が、各界において活躍されていることは、何よりその活動の正しさ・成果を示しているものと、改めて敬服する次第であります。

昨今、企業だけでなく、組織の倫理観が問われる時代になっています。礼に始まり礼に終わるという武道の根底に流れる精神と、ひたすら己を修錬するという考え方は、現代のような世の中に、最も尊び、求められていることは、言を俟つまでもありません。今後も引き続き、次なる節目に向け、部員個人個人が、明治大学の名の下、そして何より柔道部の名の下、さらなる鍛錬を重ね、自身の向上を図られることを期待する次第です。

明治大学体育会柔道部が、学生生活に夢と活力を与え続ける部として益々ご発展されることと、関係の皆様方がご繁栄されることをお祈り申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

明治大学柔道部百周年を祝す

全日本柔道連盟 会長
講道館 長　嘉納行光

今般、明治大学柔道部創立百周年を迎え、記念誌を発行されるとの事で、心からお慶びを申し上げます。

百年前といえば、嘉納師範が講道館を創設して二十年余りが経ち、講道館柔道が興隆期を迎えて各方面への柔道の普及も急速に進んだ時代でした。大学柔道もまた、この頃から昭和十年代にかけて、東京在住の学校を中心にして年々盛んになっていったわけです。その中心にあった明治大学は当時から猛練習で鳴らしたと聞き及んでおります。しかし、第二次世界大戦の敗戦と同時に占領軍の方針により、学校柔道はしばらく禁止され、大学柔道にとっても厳しい期間が数年続きました。それでも、その苦難の時代に学生諸君、また、その指導に当たられる方々の講道館柔道への熱意は少しも衰えるところがなく、脈々と受け継がれていきました。

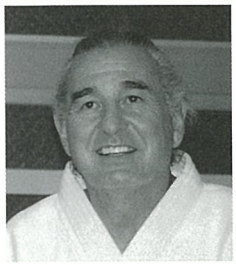
昭和二十六年、学校柔道の復帰とともに、全日本学生柔道連盟が結成されると、大学柔道は再燃し、今日に至るまで日本柔道の屋台骨を支えてこられたわけですが、その中で、明治大学出身の、葉山三郎八段、八島輝徳八段、姿節雄九段、曽根康治八段、神永昭夫九段等、諸先輩達の学柔連活動に対する貢献はたいへん大きいものであり、戦後の柔道界の発展の一翼を担ってこられたわけです。体重無差別団体の学生王者を決める全日本学生柔道優勝大会でライバルの東海大、国士舘大、日大、天理大等と息詰まる熱戦を演じて最多の十六度の優勝を飾っている「魂の柔道」は、数多くのファンを持っています。

さらに、体育学部系を持たない大学でありながら、明治大学が今日に至るまで、「質実剛健」の伝統を守り、学生の大会のみならず、日本を代表してオリンピックや世界選手権大会等の国際舞台で活躍した幾多の選手を輩出し、日本柔道発展へ大きく貢献してきたことは、言うまでもありません。オリンピックでいえば、昭和三十九年の東京五輪で正式競技に採用されて以来、学生、OBを通じて代表選手を出せなかったのは昭和五十九（一九八四）年のロサンゼルスと六十三年のソウルの二大会のみ（日本が不参加のモスクワを除く）。昨夏のアテネ五輪では、女子七十八kg級の阿武教子選手が三度目の五輪出場で見事に金メダルに輝き、四年生だった男子九十kg級の泉浩選手も銀メダルを獲得した活躍は、記憶に新しいところです。

神田駿河台の同校本校舎構内に道場があり、その距離の近さも手伝って長年、学生、OBたちが講道館大道場に足を運び、爽快な稽古を続けてこられたことも、柔道界の中軸として重責を担ってこられた由縁と言えるでしょう。

最後にこの様な長い歴史と伝統を有する本柔道部の今後益々の繁栄と発展を心からお祈りしてご挨拶と致します。

明治大学の想い出



米国連邦上院議員

ベン・ナイトホース・キャンベル

私は1949年にカリフォルニアの小さな町道場で柔道のトレーニングを始めた。その当時の柔道はクラブや町道場のみの練習だけであった。又、高校や大学のレベルはまだなく国内や国際的な選手権大会などもなかった。私はそのようなアメリカ柔道の環境の中で育った。

韓国のアメリカ空軍基地に駐屯している頃も柔道の練習を続け、1954年に帰国しサンホセ大学に入学した時も柔道の練習に励んだ。

当時アメリカの柔道家の大半が日本からの移民か彼等の子供達であった為、私は日系コミュニティーに出入りして、多くの親しい友人達に巡り会った。又、数多くの明大柔道部出身者が留学や永住目的で渡米していたが、初回渡米柔道学生のひとりでサンホセ大学に留学していた波多江健一氏に学校内で出会った。更に1950年代末期に篠原一雄主将を始め古賀悠三、大林真人などとも出会った。

1960年のローマ・オリンピックの後、1964年の東京オリンピックで柔道がオリンピックスポーツで公式種目として史上初めて認められたが、私はそのオリンピックに代表選手として出場したいと念願していた。

私は、日本の柔道のトレーニングについて出来る限りの専門書を読み、又、現地の日系人を通して多くを学んだ。そして、アメリカにいた明治大学出身の友人達の勧めがあったが為に、私は日本に柔道留学をして1964年のオリンピックまでトレーニングに励もうと決心することになったのである。

1953年には第１回のアメリカ柔道チャンピオンシップが開催されたが、私は日本に行くことになった1961年までに全米選手権初優勝や、アメリカ西海岸選手権大会では既に５連勝していた。しかしその当時の私はよりもっと強力な選手となる事を希望するならば、もっと上達したベストの人達と練習に励まなければならない事を認識していた。

明治大での練習はそれまで私が過去に経験したよりも非常に厳しいものであった。毎日の練習に加えて１週間に３回ウエイトトレーニングを行った。又、十分な気力がある時には警視庁の道場での早朝柔道練習に参加し訓練に励んだし、その上ランニングもやった。

その当時の明大柔道部は、黄金時代と称され、その名声をとどろかせており、曽根、神永、そして中谷や坂口各氏を含む国際柔道界でも有名で偉大な人達が私の友人となってくれた。また明大は全日本学生柔道優勝大会などでは殆ど毎年のごとく圧勝していた。

同時期に明治大で練習していた外国人は私ひとりではなく、1964年にアメリカ代表オリンピックチーム選手団として参加した４人の男子の中、３人が明治大でトレーニングしていた。ポール・丸山、ジム・ブレッグマン、そして私である。東京オリンピックの日本柔道代表選手団４人の中で、２人が明治大で同じく練習をしていた仲間達であった。神永、中谷の両氏である。

あれから多くの歳月が流れたが、私は明治大での日々を忘れた事はない。約10年程前、私はアメリカ上院議員になってから日本へ帰る機会を得た。それは元チームメイトと同窓会をするということで素晴らしい経験を味わった。その時、私は、姿先生とは1964年を最後に帰国して以来ご無沙汰していたのだが、その姿先生がお年を召されていたにも関わらず全く昔と変わらない動きで練習されていたのも想い出す。そして私の親愛なる友人達、鳥海、朝田、田村、前田、神谷、田中、山本、関など、全ての人達の名前は列記出来ないが、多くの友人が同窓会に参加してくれ素晴らしい多くの思い出を浮かびあがらせてくれた。何人かの明大柔道部のメンバーは同窓会には参加していなかったが、私の滞在中に彼等と会うことが出来た。例えば、私は、現在プエルトリコに住む富田氏や、フランスに旅立つ寸前の大国氏とも会うことが出来た。

私の人生の中で国際フレンドシップは明治柔道トレーニングを通じて続いている。古いアメリカ人はよく次のように言う。“新しい友人を作ることも大切だが、旧友も大切にすべきである。彼等は金や銀に値するものである”。私は明治大学の黄金時代を決して忘れない。

（翻訳・篠原一雄）

My Years at Meiji University

United States Senator

Ben Nighthorse Campbell

I began judo training in 1949 in a small Machi dojo in California. All judo was done at the club level in those days. There was not any judo at the high school or college level yet, nor were there any National or International championships of any kind. In a way I grew with the American judo movement.

I continued judo training while I was in the United States Air Force statinoed in Korea and when I returned and entered San Jose State University in 1954.

At that time almost all Judoka were Japanese immigrants or their children, so I made many close friends in the Japanese community. It was at San Jose State University that I met Mr. Ken Hatae, one of the first of many Meiji judo team members who came to the United States to attend college or to become permanent residents. Other members of the Meiji team in the late1950's, who came to the United States, were team captain Kazuo Shinohara, as well as Yuzo Koga and Makato Obayashi.

In 1960, after the Rome Olympic Games, we learned that judo would be included as an Olympic sport for the first time in Tokyo in 1964. I wanted to be on that team.

I had read and learned as much as I could about judo training in Japan. It was the recommendations of my Meiji friends in America that led me to the decision to move to Japan and train until the Olympic Games of 1964. The first United States Judo Championship began in 1953, and so by the time I went to Japan in 1961 I had already won five Pacific Coast Championships and my first United States Championship. I knew that if I wanted to become a stronger competitor, I must train with the best.

The training at Meiji was harder than I had ever experieced. In addition to regular training I would weight train three times a week. When I had enough energy I would attend judo practice at the morning police dojo or run.

Those were the years often referred to as Meiji Judo Team's 'Golden Years.' The great names of the international judo mats, including Mr. Sone, Mr. Kaminaga, Mr. Nakatani and Mr. Sakaguchi, became my friends. Almost every year the Meiji Team dominated the all Japan University Championships.

I was not the only foreigner who was at Meiji during those years. In fact three of the four men on the U.S. Olympic Judo team in 1964 were Meiji trained. They were Paul Maruyama, Jim Bregman, and myself. Two members of the four man team representing Japan that same year were also Meiji trained. These two men were Mr. Kaminaga and Mr. Nakatani.

Now it is many years later, and I still remember my days at Meiji. About ten years ago as a member of the United States Senate I had the opportunity to return to Japan. It was a wonderful experience to have a reunion with my old teammates. I remember Sugata-sensei was still practicing as he did when I last saw him in 1964. So many of my dear friends came to our reunion,friends like Mr. Toriyumi, Mr. Asada, Mr. Tamura, Mr. Maeda, Mr. Kamiya, Mr. Tanaka, Mr. Yamamoto, and Mr. Seki to name just a few. They all brought back so many great memories. Some Meiji team members were not there, but I have seen them in my travels. For example, I saw Mr. Tomita who now lives in Puerto Rico and I saw Mr. Okuni on a trip to France.

The International friendships made through Meiji judo training last throughout our lives. There is an old American saying that goes: 'make new friends, but keep your old, these are silver and those are gold.' I will never forget my Golden years at Meiji University.

明治大学（柔道部）100周年

国際柔道連盟スポーツ理事

フランソワ・ベッソン

私はこの偉大なる大学の柔道部100周年記念に際し、柔道家としてお祝いの言葉を寄稿させていただく事を光栄かつ誇りに思っております。

柔道界、とりわけフランスにおいては日本の大学はもっとも重要な役割を演じてきました。明治大、日大、天理大、東海大などです。なかでも明治大は特に重要な位置を占め、何十年もの間、外国人柔道家たちと親密な関係を築き、維持し、発展させてきました。私は光栄にも明治大に受け入れていただき、そこで練習するという喜びを得ることができました。また、諸先生方、先輩方、友人たちと出会う機会を得ました。すべての方の名を思い出すことはできませんが、忘れることのできない方々もいます。姿先生、威厳の中にもかわらぬやさしさを持ち合せた特別な人柄の神永先生、大国先輩、鳥海先輩……。

ほかにも多くの方々が私に多くのものをもたらしてくれました。それらの方々から私は多くのものを学び、人生の指針を得ました。ある著名な作家は「故人の真の墓碑は、生きている人々の心の中にある」と書いています。明治大で学んだすべてのことが、私の心と精神のなかに生き続けています。明治大、それはまさに、先生や先輩方の精神が生き続ける独特な雰囲気の御茶ノ水の道場での、厳しい練習のつらい時間、たぐい稀な豊かな時間、深い友情などの思い出そのものです。

ここに私の感謝の気持ちとともに、私たちの親愛なる大学（柔道部）の100周年記念に対し心からお祝い申し上げます。

Centenaire de I'Université de Meiji

François Besson

Je suis particulièrement honoré et fier d'avoir été invité à rédiger ce message en tant que judoka et dirigeant du Judo,pour la célébration du Centenaire de cette prestigieuse Université.

Dans le monde de Judo et en France notamment les Universités Japonaises jouent un rôle de la plus grande importance; je me dois d'en nommer quelques unes, Meiji, Nishidaï, Tenri, Tokai,...

Et Meiji occupe une place toute particulière, depuis des dizaines d'années des relations étroites ont été établies, entretenues et développées entre cette Université et des Judokas étrangers.

Si d'une part j'ai eu I'honneur d'y être accueilli et le plaisir de pouvoir m'y entraîner, j'ai eu d'autre part la chance d'y rencontrer des personnes exceptionnelles, des Maîtres, des Anciens, des amis. Je ne pourrai les rappeler tous mais je ne peux m'empêcher de citer, Tsugata Senseï, Kaminaga Senseï (qui avait lui aussi une personnalité hors du commun, alliat une gentillesse permanente à une autorité naturelle), Okuni Sempaï, Toriumi Sempaï. . . .

Comme pour bien d'autres tous m'ont apporté beaucoup, ils ont contribué à ma formation et m'ont marqué pour la vie. Si un écrivain célèbre a écrit « le vrai tombeau des morts se trouve dans le cœur des vivants » , je peux affirmer que tous ceux qui nous ont quittés restent présents dans nos cœurs et nos esprits.

Meiji c'est tout cela, c'est le souvenir du Dojo d'Ochanomizu à I'atmosphère si ceractéristique où l'esprit des Anciens est présent, les dures heures d'entraînement, des moments d'une rare richesse, des amitiés profondes qui durent. . . .

Je tiens à exprimer toute ma reconnaissance et à formuler tous mes vœux les plus sincères pour la réussite de la célébration du Centenaire de cette Université qui nous est particulièrement chère.

明治大学柔道部百周年によせて

全日本学生柔道連盟 会長　柘植健司

明治大学柔道部設立百周年おめでとうございます。

長い歴史をもつ明治大学柔道部ですが、わたくしは明治、大正、そして昭和の前半のことはよく知りませんので、明治大学柔道部の歴史という観点からすれば、はなはだバランスを欠いた個人の経験にもとづく感想といったものになってしまうのですが、戦後の柔道が復活して間もないころに選手だった方々のことを主に書かせていただきます。

学生柔道は昭和二十六（一九五一）年に復活しました。わたくしが本格的な柔道の試合を見たのが明治大学の柔道でした。昭和二十七年に全日本学生柔道優勝大会がはじめて開催されてから平成十七年で五十二回の大会が開催されることになります。そしてこれまでの優勝回数は明治大学が十六回、東海大学が十二回、天理大学が十一回、日本大学が五回、中央大学が三回、国士舘大学が三回、拓殖大学が一回、近畿大学が一回となっております。これを見ると明治大学の柔道がいかに強いかがよくわかります。

昭和二十七年度の第一回全日本学生柔道優勝大会の優勝校は明治大学でした。その後第三回大会まで明治大学は圧倒的な強さで三年連続優勝を飾りました。

その頃の明治大学柔道部のメンバーについて、記憶しているのは曽根、金子、山尾、末木、川辺、渡辺（政雄）、渡辺（欣嗣）さんたちです。とくにはっきり憶えているのは昭和二十八年だったと思いますが、蔵前の旧国技館で試合が行われた明治大学と日本大学の決勝戦です。この日、渡辺政雄さんはすべての試合ですばらしい活躍をされました。その右の体落とし、大内刈、内股は切れ味の鋭い実にきれいな技ですべての試合を一分または二分以内で勝負を決めていました。

まだ大学に入ったばかりで柔道をはじめてからそれほど時間のたっていないわたくしにとって渡辺政雄さんの柔道は驚きの一語につきました。この柔道で完全に柔道にとりつかれてしまったわけです。渡辺欣嗣さんの左の内股、体落もこれに劣らずすばらしいものでした。このお二人の技の性質は全く違うものでしたが、それぞれ特徴があり、個性がありました。川辺一彦さんの背負投、大内刈も冴えていました。大将だった末木さんは決勝で日本大学の大将と組んで間もなく大外刈できれいな一本を取りました。

柔道の技とはかくも美しく、かつ迫力のあるものだということを初めて知ったのもこのときです。切れる技は力のみではないこと、動きに無駄がなく、速い技であり、すべてが理にかなっていることもわかりました。

試合では組みぎわが技をかけるひとつのチャンスではありますが、あくまでも組んで技をかけるのが柔道の基本であること、そのためには体さばき、崩し、連絡変化が大切であることといったこともよく理解できました。そしてそのような魅力ある真の柔道をやっているのが明治大学の柔道でした。

わたくしが柔道にのめり込むきっかけとなった要因の一つは、このようにこれこそが本物の柔道だということを示してくださり、また稽古をつけてくださった明治大学柔道部のみなさんのおかげです。おかげさまで月例試合と紅白試合に出て二年生のときに初段、三年のときに二段、四年生のときに三

段をとり東京での大会で優秀選手に選ばれる幸運にも恵まれました。もっとも明治大学柔道部の方々のように強くはなれませんでしたが…。

その頃の講道館は水道橋の駅のすぐそばにありました。今の東京ドームホテルのあたりです。その講道館には全日本選手権に出場するような強い選手も沢山来ておりました。わたくしもよく講道館へ行き、そこでよく稽古をつけていただいたものですが、そのうちの一人に内股がたいへん上手な人がおりました。わたくしが乱取りをお願いしたときは、この人が誰であるのかは知らなかったのですが「柘植、石橋さんと稽古していたね。あの人は内股の名手といわれる石橋毅次郎さんだよ」と後で友人が教えてくれました。しかし、正確には、稽古していたのではなく、稽古をつけていただいていたのはいうまでもありません。

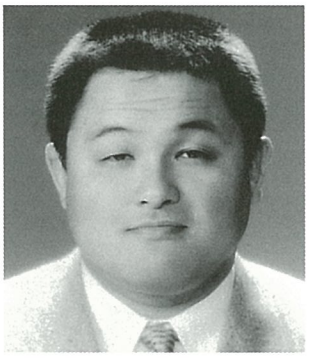
わたしが講道館の初段の月例試合にでていたころのことですが、いくつにも仕切った隣の試合場で体つきがすらりとした少年が内股、体落、大外刈、大内刈などで何人も抜いていました。わたくしの試合が終わってしばらくしても、まだまだその少年は試合を続けていました。相手をとっては投げ、とっては投げという感じでした。合計十九人を投げてやっと終わり、この少年が初段から三段に即日昇段したのを記憶しています。この少年が神永昭夫さんでした。まだ高校生だったと思います。

明治大学柔道部の出身で傑出した選手はあまりにも多く、ここですべてのお名前をあげることはできません。ほんの一部の中のさらに一部の方を一つの例として、引用させていただいたに過ぎません。ここにお名前をあげさせていただいたのは、戦後間もない時期に活躍された方々であり、そのなかにはすでに亡くなられた方も多くあり、いまの若い人はご存じない方が多いと考えたからでもあります。その後の明治大学柔道部の活躍ぶりは、みなさまもご存じのとおりです。

具体的に数えたことはないのですが、毎年四月二十九日におこなわれる全日本柔道選手権大会に出場した選手はおそらく明治大学柔道部出身の方が一番多いのではないかとわたくしは思っています。東海大学には松前重義先生のような傑出したカリスマ的な方がいらっしゃいました。したがって東海大学が全日本学生柔道優勝大会で十二回優勝したというのは理解できます。

これに対し、明治大学がこれを上回る十六回の優勝をなしとげたというのは、一体何に根ざすのでしょうか？　それはただ一人の飛びぬけた存在があったからではなくて、明治大学柔道部にかかわるすべての方々の努力の結晶が、この、世界に例を見ない偉業をなしとげたのだと、わたくしは考えております。

明治大学柔道部百周年によせて



全日本柔道連盟 強化部長　山下泰裕

明大柔道部の偉大なる足跡に対し心からお祝い、お慶び申し上げます。明大柔道部のことで最初に頭に浮かぶのは、三十五年前、あの神田の柔道場で初めて稽古した時のことです。当時中学一年生でしたが、明大ＯＢの工藤欣一先生のご尽力で、第一回全国中学生柔道大会の直前に明大中野高の柔道部員の胸を借りて稽古しました。その後、中学時代は毎年、明大の道場をお借りしましたが、すばらしい伝統を持つ独特の雰囲気はとても印象に残っています。又、私の中学の先輩で、岩田久和さんや田中弘一さん等が明大柔道部で活躍しておられましたので、私も「もっともっと強くなって明大へ進みたい」とその頃は思っていました。当時は明大柔道部の黄金時代だったと思います。

また、工藤欣一先生には、その後いつも声をかけていただき励ましていただきました。二人でこれからの柔道界について熱く語り合うこともありました。その工藤先生が先日ご逝去され、大変残念な気持ちで一杯です。

逆に、私の学生時代の頃、明大の低迷期で、あまり元気がなかったように感じます。しかし、小川、吉田が入部した頃から、力強さ、たくましさが復活しました。決して部員は多くないが自信に満ち、最後まで向かっていく柔道が甦った気がします。東海大学の監督としては、明治大学と全日本学生柔道優勝大会の決勝で四度対戦しました。二勝二敗でした。明大柔道の勝負強さや底力を感じました。

日本柔道界には、明治大学以外にもすばらしい伝統を持つ大学柔道部があります。その中で明治大学柔道部の今までの燦然と輝く実績はもちろんですが、柔道選手として一流だけでなく社会人としても（特に実業界で）立派に活躍されている方々が多いこと、ＯＢの方々の母校、並びに柔道部に対しての思いが強く、非常にまとまっていること、などは、他校に類を見ないすばらしい伝統であり、ぜひこれからもこの良き伝統を受け継いでいってもらいたいと思います。

歴史の浅い東海大学柔道部ですが、いつも明治大学と覇を競い合うとともに、しっかりした人間教育ができる柔道部を目指し努力していくつもりです。また、日本柔道界発展のため、明治大学柔道部ＯＢの方々と今まで以上に力を合わせて活動していければと思っています。

これからの百年が、明治大学柔道部にとって今までの百年以上のすばらしい輝くものでありますように、益々のご発展を心からお祈りいたします。